

野火に想ふ

鶉殿新一

吾が日吾が夢

昨日今日

秋の野原に香と焚く

(一)

たそがれの

枯野を焼けば

ありなしの香にこめて

君を想ふよ

うつゝなに心狂ふよ

野原ゆく

炎さながら

(二)

すがれゆくたゞ煙なり

吾が情

君に傳へて

陽に透けばかげらひなきに

何事ぞ

たゞ眼にしみて

秋の野に涙しじとは

(三)

たゞ思ふ

君と吾が情ごころに

獨り焚く

野火の煙よ

又香しき炎通へと。

二月の歌

夕もやに立佐びた

青馬に

吾がねびきする草の匂ひ

年越してなをも消えはてず

かそけくも甘くすつばく

秋の陽の香とどめて

枯草の其の匂

又なやましく馬膚の香も流れ

カサカサと馬は喰へば

音にまじりて鼻をうつ

仰げば

空に月

新月ぞ香をこぼして

光うるみ出したり。

瓜畑に立ちて

月！

楊樹の上三寸は

八日か

濡れた胡瓜の香がするよ

唯ぞ

向の畑で

青瓜をかじる奴は

朝の月

沖は雨だよ

夜明だ

なぎだ

波は干潮でにぶ藍だ

月は五日か

脍せた女だ

潮ぬれの蒼さ白さだ

すがれた木葉だ

きりたての朝の瓜だ

うつらうつらに月がさ

子いかの脊に乗てるよ

濱のかげらふか

羽虫か

蒼白い情緒に

ちらと波紋を投げたのは。

夏の磯

(島原多比良の磯にて)

ひきしをの

磯のはかなみ

我影もうすら長くて

さらさらと

かんなのくすの吹かれて散るよ

薄陽に

空は

風か

うすびの蒼青は

名も知らぬ

小鳥群れて渡れど

あわれなり

聲一つ。